

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 8 月 15 日 10:21AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 39,500～45,000 円

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】 (NY ダウ) 37,500～45,500 ドル
(S&P500) 5000～6500

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 (ナスダック 100) 20,000～24,000
(ナスダック総合) 18,000～22,000

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 130.000～151.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000～102.000

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



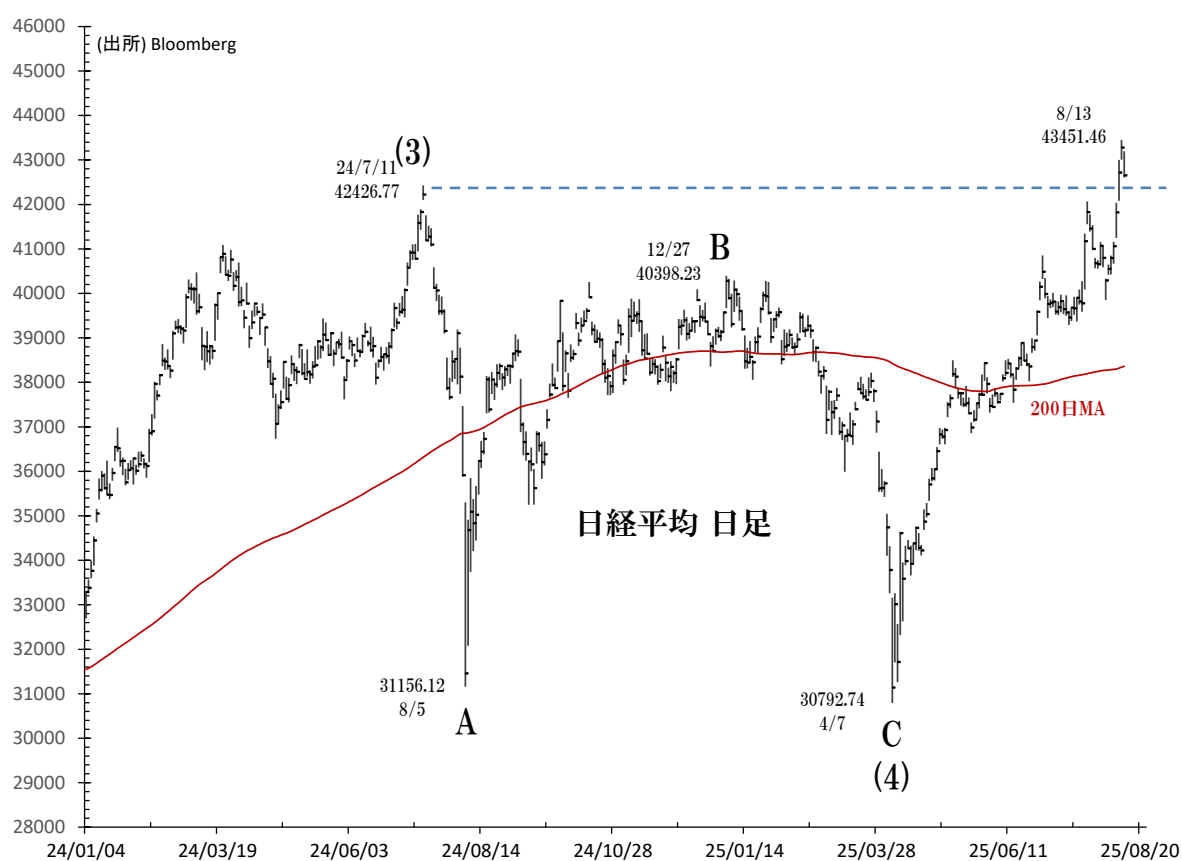
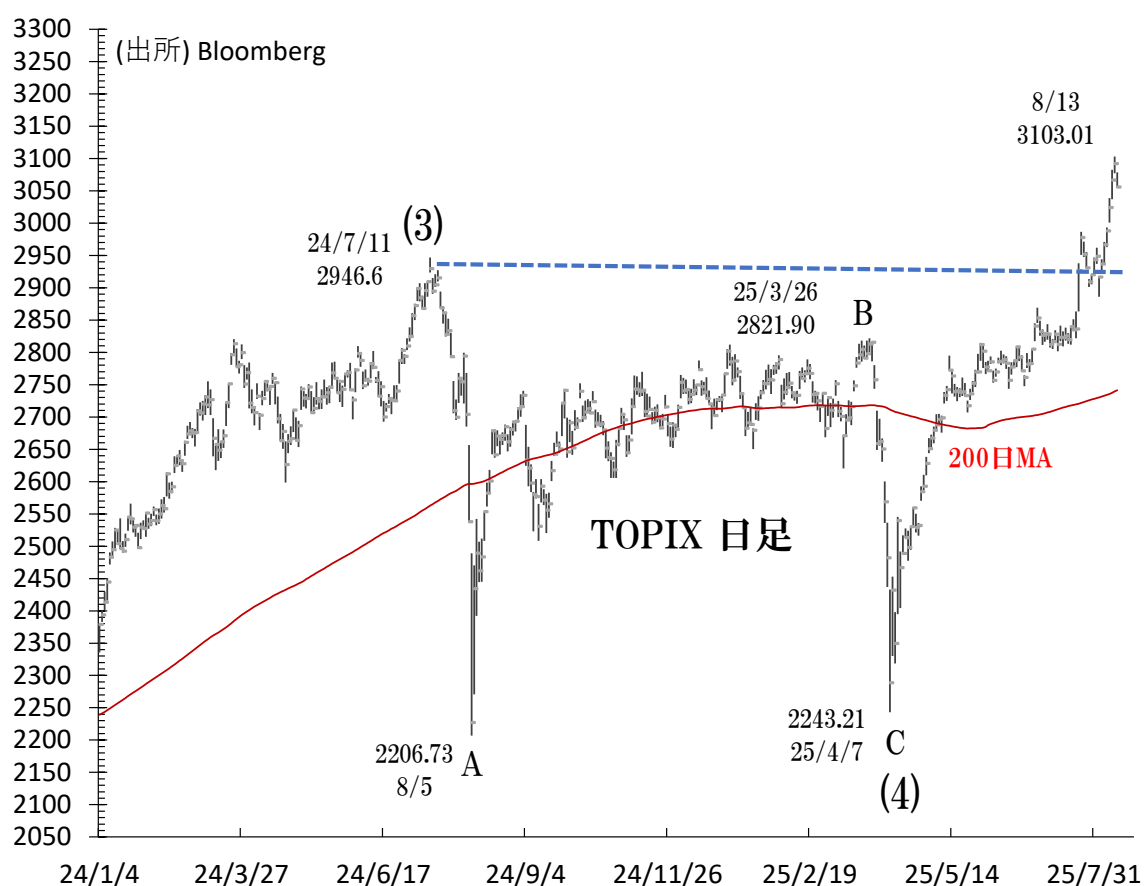
【週足 エリオット波動分析】

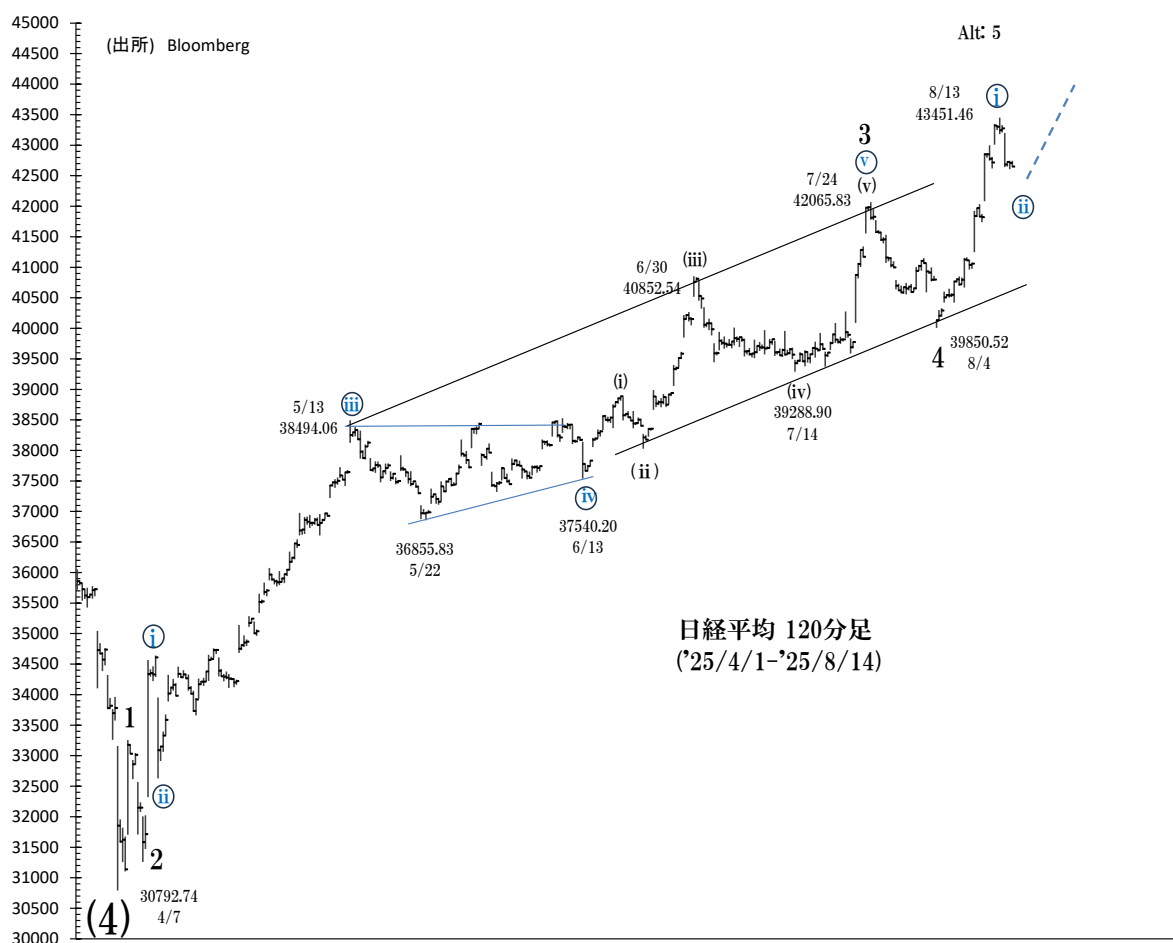
今年 4 月安値(30,792.74 円)以来の上昇はインターミディエイト級第(5)波に当たります。この第(5)波の完成を以て、コロナショック底(16,358.19 円、20 年 3 月)以来のプライマリー③波は完成します。

8 月 12 日、TOPIX に続いて日経平均も史上最高値を更新しました(翌 13 日には一時 43,451 円まで上昇)。まさに想定していた通りの展開ですが、多くの投資家は 4 万 2000 円を超える株高にはかなり懐疑的だったようです。

例えばこの 4 カ月間で信用買い残は約 4.47 兆円(4/4)から約 3.9 兆円(8/8)へ減少しましたが、信用売り残は 4641 億円から 1 兆円へ増えています。これは先高観が乏しいなか買いポジションを手仕舞い、その一方、相場の下げを見込んでカラ売りをしかける投資家が増えていたことを伺わせるものです。

第(5)波目には、①企業業績や景気などファンダメンタルズは以前より弱め、②平均出来高は少ない、③中小型株が選好されやすい、④先行きへの極端な楽観論、などの特長があります。現在は①～③は揃っていますが、まだ④の状況にはありません。つまり極言すれば、懐疑論が強い楽観論に置き換わらない限り第(5)波の強気相場は続くでしょう。今後数カ月内に 4 万 5000 円に達する可能性もあります。





【日足・時間足 エリオット波動分析】

[TOPIX]

8月8日に初の3000台乗せをはたし、13日には一時3103まで上昇しました。フィボナッチ比率からの目標価格は①[3164]、②[3323]などです。

[日経平均]

39,850円(8/4安値)から、マイナー級の第5波による上昇が進行中とみられます。

43,451円(8/13高値)からを第5波中マルii波のスピード調整と読むことができます。下値レンジとして[42,601円～42,075円](マルi波の上昇に対し23.6%～38.2%押し)を想定します(14日には一時42,606円まで下げました)。

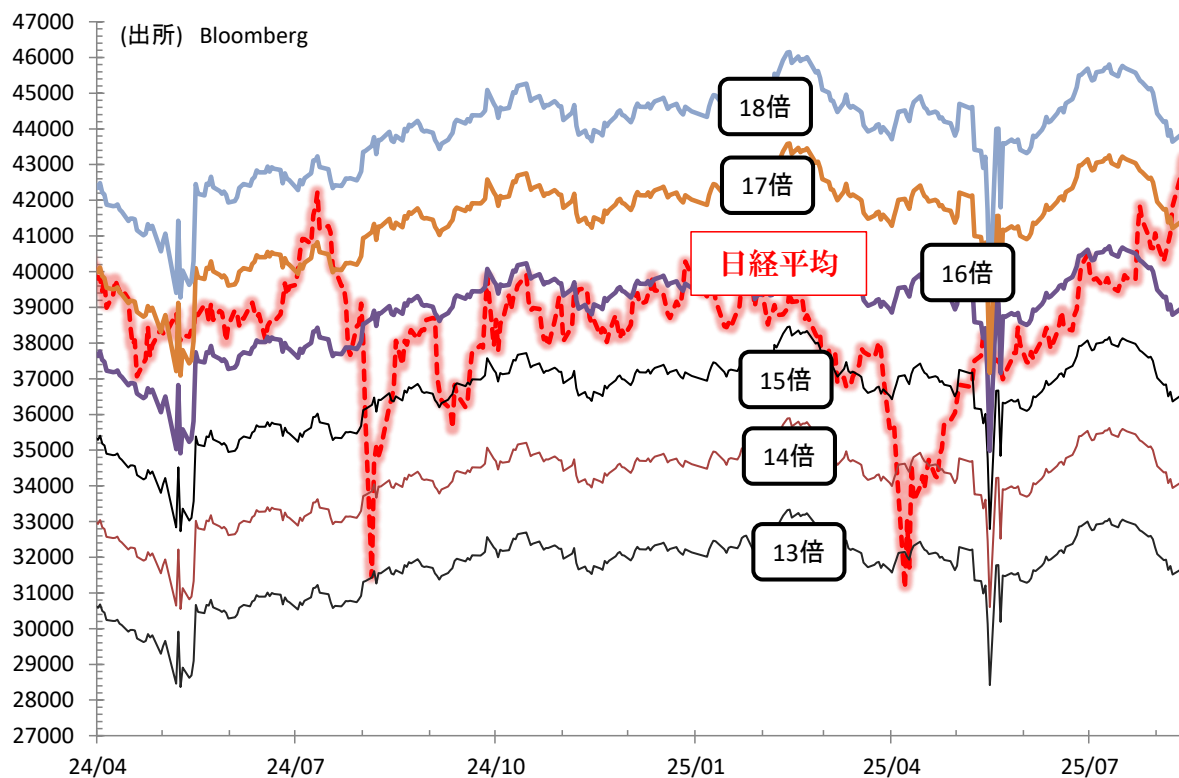
マルii波の後にはマルiii波の上昇が続き、それは日経平均を更なる高値へ押し上げるでしょう。

なおフィボナッチ比率などから得られる第5波の目標価格は以下の通りです。4万5000円処をクリアすると、次の大きな節目として4万9000円処に注目できます(ただし、そこまで上昇する必然性はありません)。

[44,597円][45,230円][48,568円][48,896円][48,964円][49,074円]

[予想 PER 別の日経平均水準]

8 月 14 日の日経平均予想 PER は 17.47 倍・予想 EPS は 2441 円。今年 2 月 13 日には過去最高の EPS・2564 円を記録しています。



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ日足 エリオット波動分析】

(プリファード・カウント)

22 年 10 月安値(28,660 ドル)からの(B)波による上昇は今年 1 月高値(45,054 ドル)で終わり、以来、C 波による下落局面です。足元、C-(2)波完了を見極める局面が続いています。今後は C-(3)波の下げにより、4 月安値(36,611 ドル)を大きく下回る展開が想定されます。

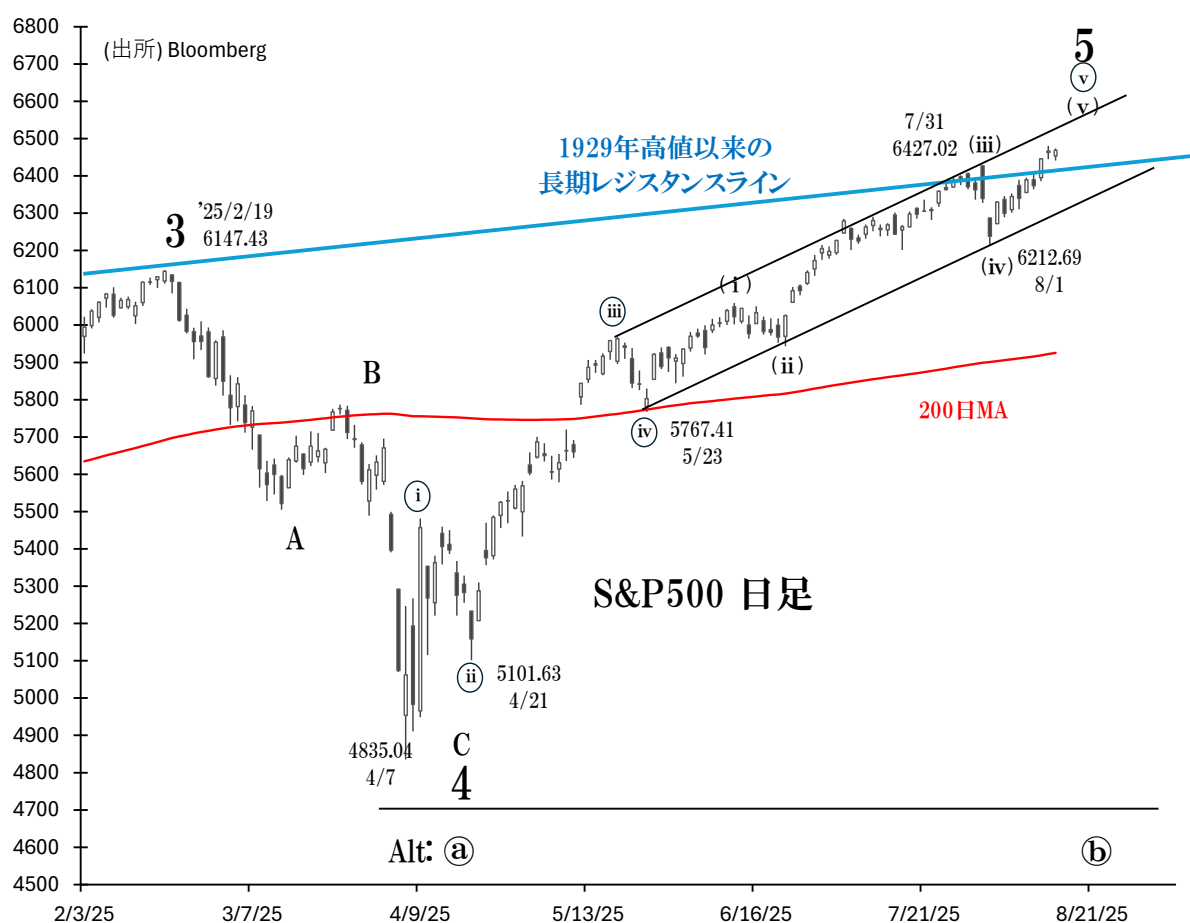
ただし 45,054 ドルを上抜くと、この波動カウントは否定され—7 月 23 日には一時 45,016 ドルまで上昇しています—下記オルタナティブ・カウントに切り替えます。

(オルタナティブ・カウント)

22 年 10 月安値(28,660 ドル)以来の五波構成による上昇(＝プライマリー級第⑤波)は、今年 4 月安値から最後の上昇(＝インターミディエイト級第(5)波)が進行中です。

あるいは S&P500・ナスダックで検討しているごとく、4 月からの上昇を「トライアングル」における⑥波とカウントすることもできます。

上記波動カウントの正否は当分の間は判明しません。しかし少なくとも当面の高値を付けつつあること、相応の調整入りが近い、などの点では一致しています。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

7月下旬に、1929年と2000年の高値を通る超長期レジスタンスラインに達しました。前回ケースを振り返ると、S&P500は昨年12月初めに同ラインに到達し、今年2月下旬まで3カ月近くレンジ相場を形成しました。そこから4月底までは一気に20%下げています。このときを参考にすると、今後S&P500は10月頃までは高値圏でもみ合いますが、その後には急落が控えていることになります。

FactSetによれば、S&P500の(12カ月先)予想PERは22.1倍(8/8時点)。これは5年平均(19.9倍)より11.5%、10年平均(18.5倍)からは20%、各々「割高」な水準です。ひとたび調整入りとなれば、10%~20%の調整は普通に起きることでしょう。

【S&P500 長期エリオット波動分析】

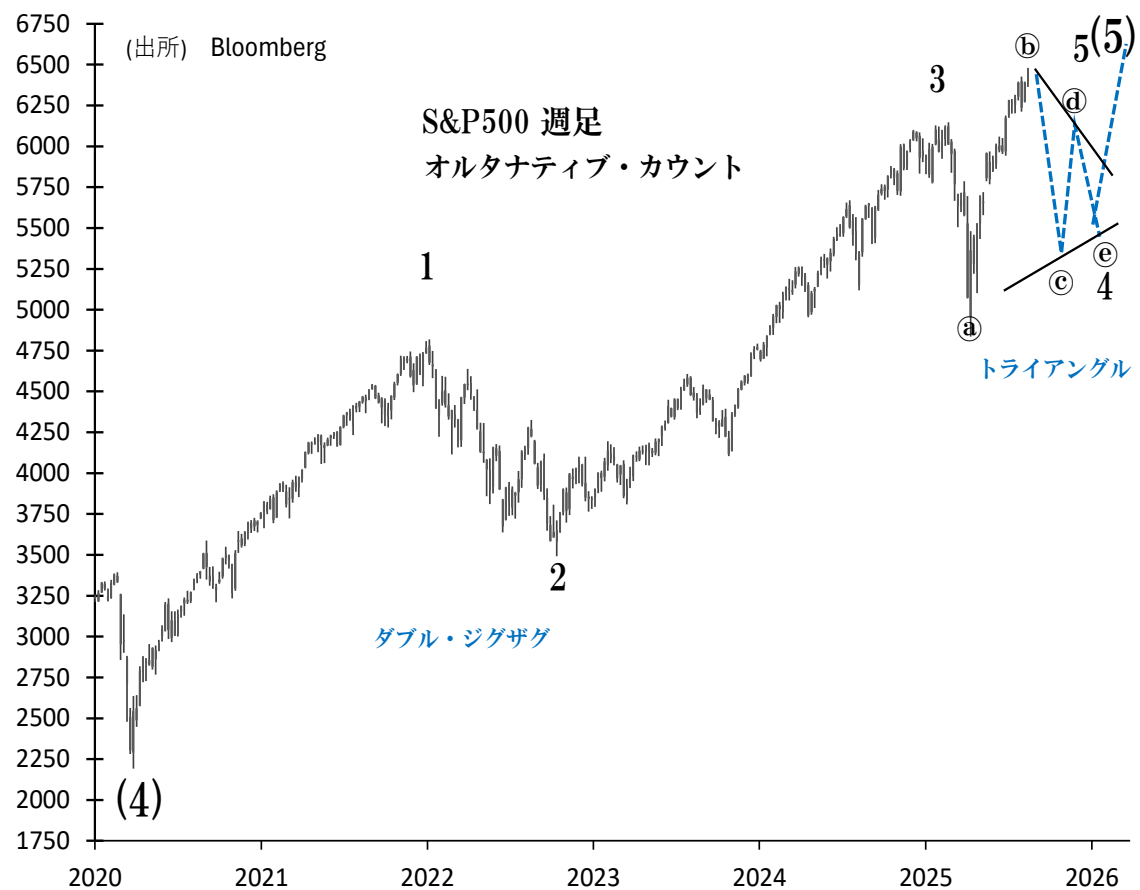
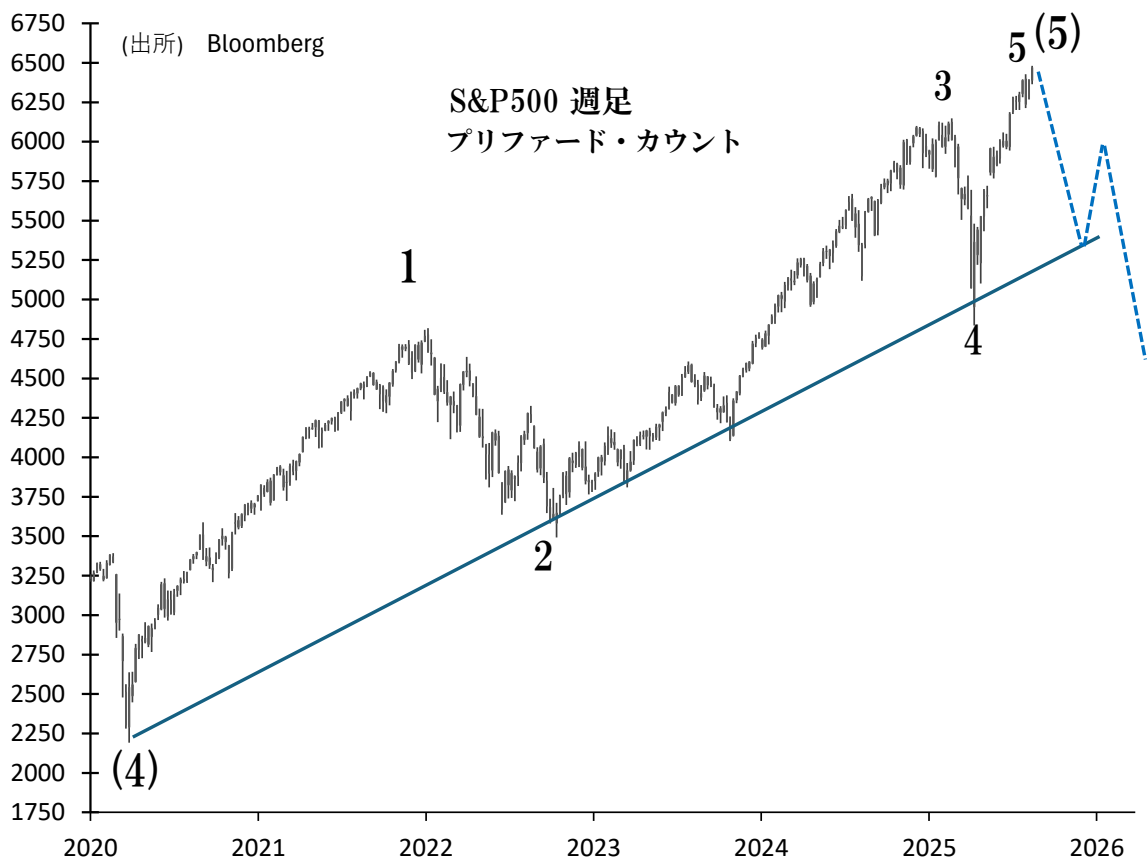
（プリファード・カウント）

4月安値(4835)からの上昇は、インターミディエイト級第5波に位置付けられ、それが終わると長期にわたる調整スタートとなります。それは4月安値を大きく下回ることが予想されます。

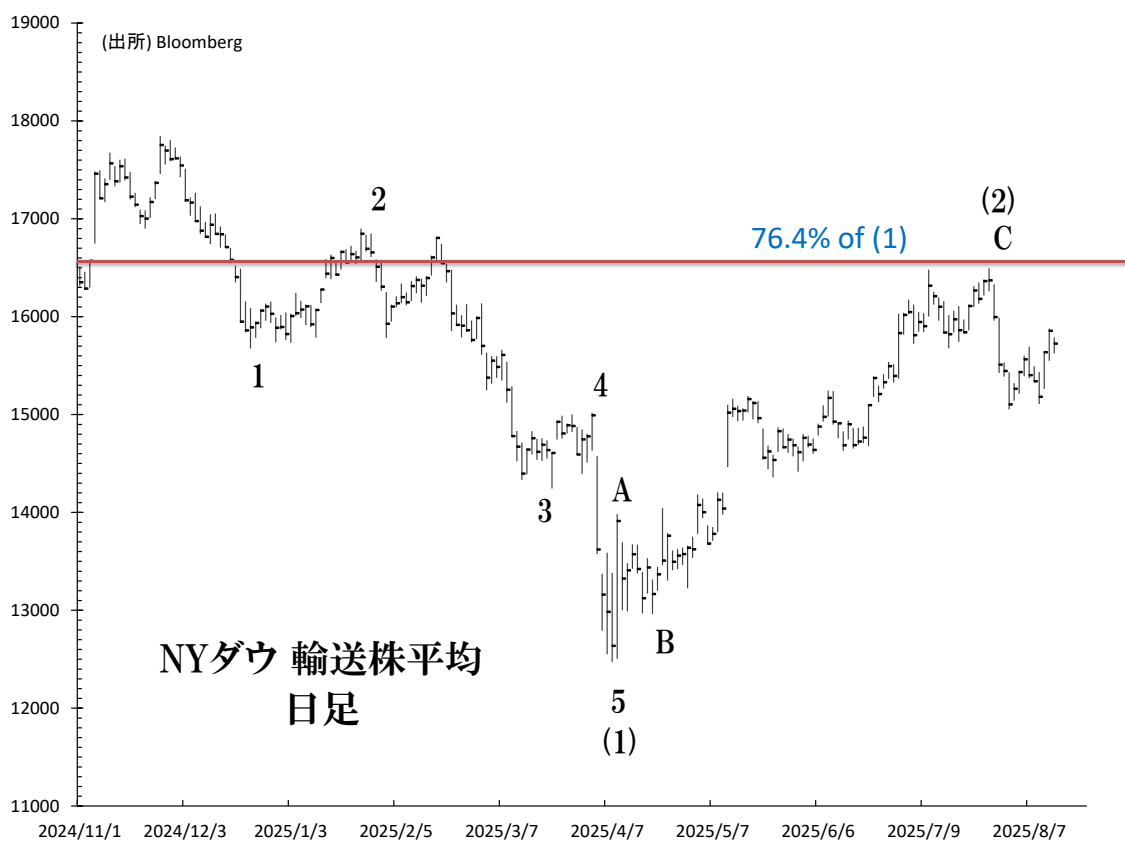
（オルタナティブ・カウント）

4月からの上昇は、トライアングル中⑥波のリバウンドに位置付けられます。

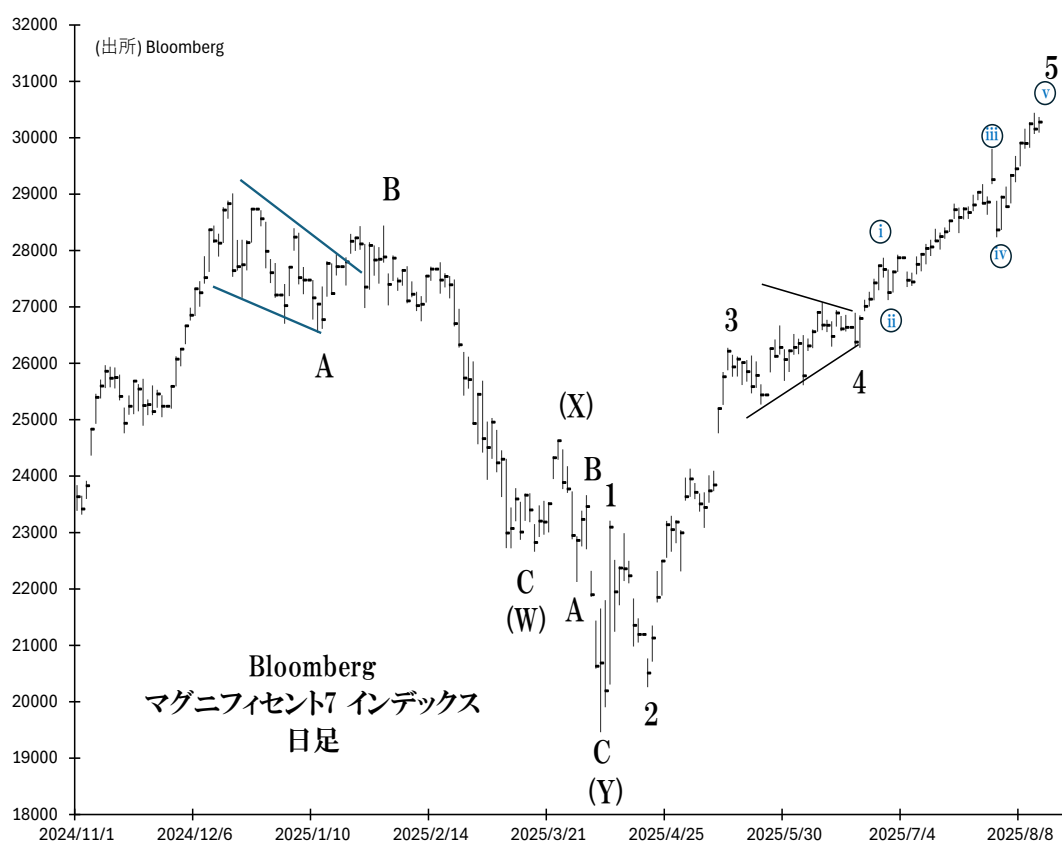
近々⑥波の下げがスタートするとみられ、それは③波(2月~4月)下げ幅に対し、62%~66%の大きさ(813~866ポイント)になるでしょう。そうすると⑥波によりS&P500は5400を下回る展開になりそうです。



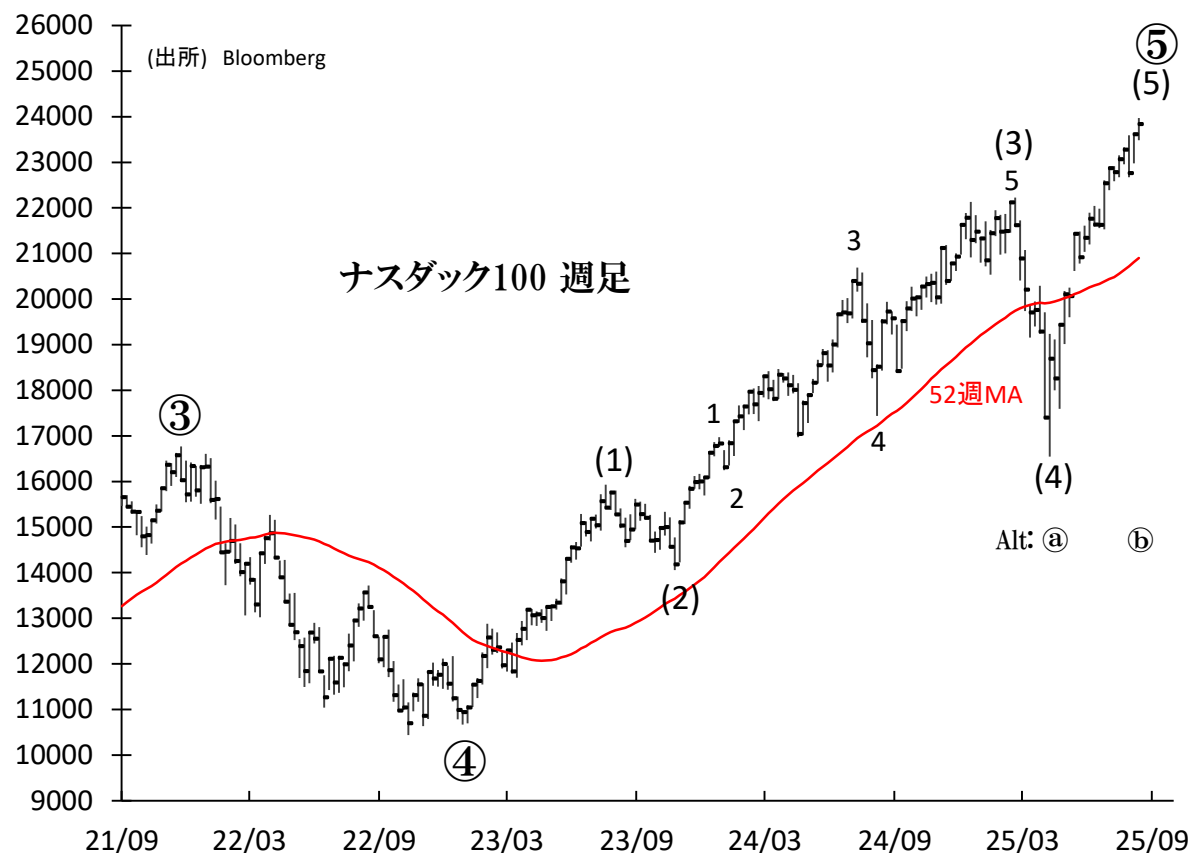
[ダウ輸送株平均] 第(1)波の 76.4%戻り水準で打ち返されている



[マグニフィセント 7] 4 月安値からの 5 波構成は完成へ



ナスダック



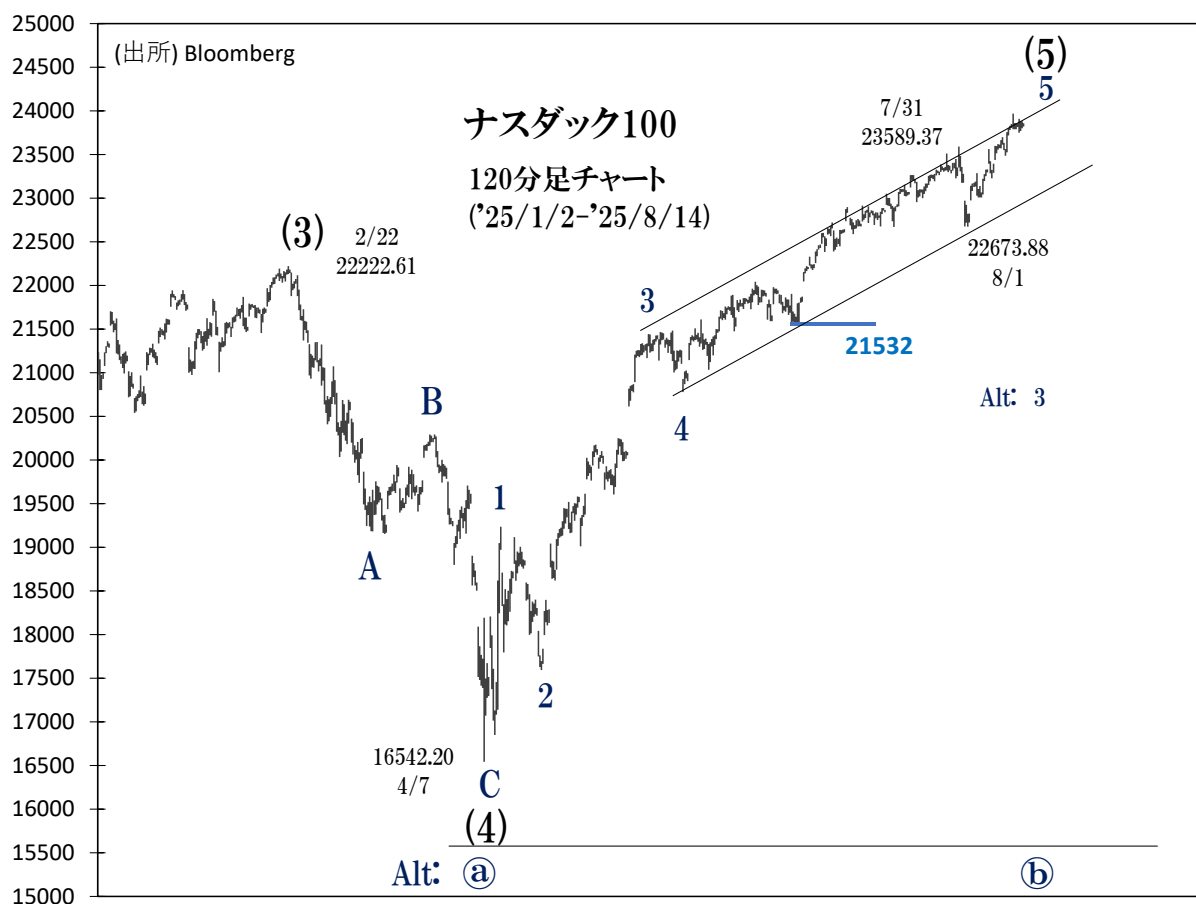
【ナスダック 100 週足 エリオット波動分析】

(プリファード・カウント)

4 月安値(16,542)からの上昇は、インターミディエイト級第(5)波の上昇に相当します。既に最高値を更新しており、第(5)波はいつ終わってもおかしくありません。遠からず調整局面が始まるとみられ、それは数年間ターム続く、長く大きなものになるでしょう。

(オルタナティブ・カウント)

4 月からの上昇は「(ランニング)トライアングル」中⑥波に当たります。これは S&P500 のオルタナティブ・カウントと同様であり、遠からず③波の下落に入る見通しです。これによると今後の調整規模は、想定されるシナリオではもっとも小さいと想定されます。それでも③波の下げ幅は②波のそれに対し 62%~66% となり、⑥波の高値からは 3500~3750 ポイントの下げになるでしょう。



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

4 月安値 16,542 からの上昇は、インターミディエイト級第(5)波、あるいは、第(4)波「トライアングル」中⑤波とみられます。

8 月 13 日には一時 23,969 まで上昇し最高値を更新しました。

既にフィボナッチ比率からの上値想定レンジ[23,195-24,224]内にあり、当面（あるいは長期的な）の高値は何時つけてもおかしくないでしょう。

22,673(8/1 安値)を下回ると最初の弱気トリガーが発動します（この場合、ナスダック 100 は当面 21,532 を目指す可能性があります）。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

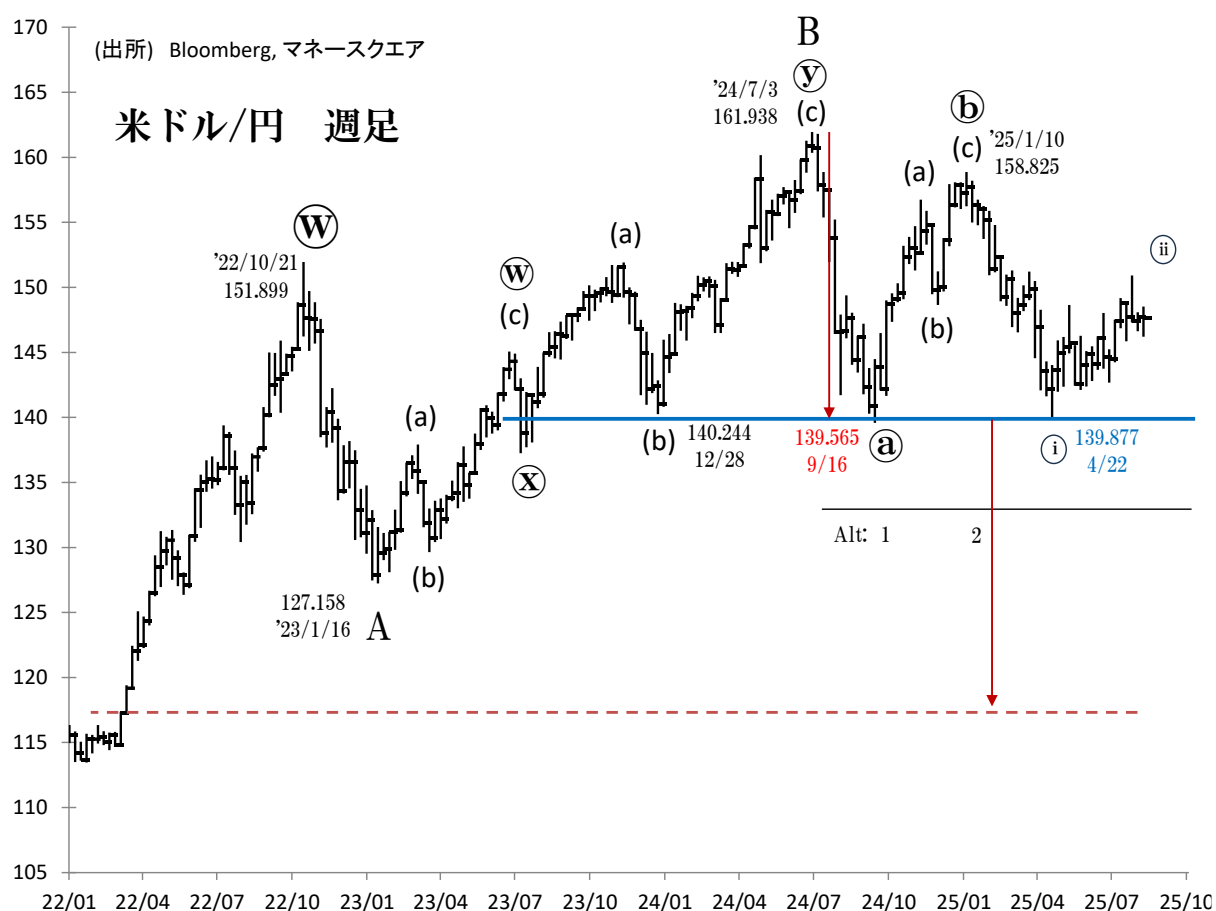
151.899 円(22/10/21)から⊗波「円高局面」が進行中です。この⊗波により米ドル/円(ドル/円)は、2028 年 4 月頃までレンジ相場を形成する、というのが基本シナリオ。24 年 7 月の 161.938 円は、15 年 6 月・125.860 円から 9 年目に付けた「8 年サイクル高値」とみられます。

22 年 10 月以来の⊗波が描くパターンとして大きくは、①[ランニング・トライアングル]、②[エクспанディッド・フラット]、これら二通りの可能性があります。

①の場合、現行 C 波は A 波安値(127.158 円)を下回りません。C 波は三波で構成され、まずは 2011 年からの上昇チャネルのセンターライン①137.445 円(8 月)がサポートレベルとみられます。

もっとも 139 円処を下抜くとヘッド・アンド・ショルダーズ型の天井パターンから明確に下放れ始め—上述したセンターラインで底入れせずに—フィボナッチ・サポートの[128.945 円]を試すと思われます。

②の場合は、現行 C 波(五波構成)はチャネル下限(②)を目指すような、より大きなドル安・円高が見込まれます。②の水準は 117.820 円(8 月)です。



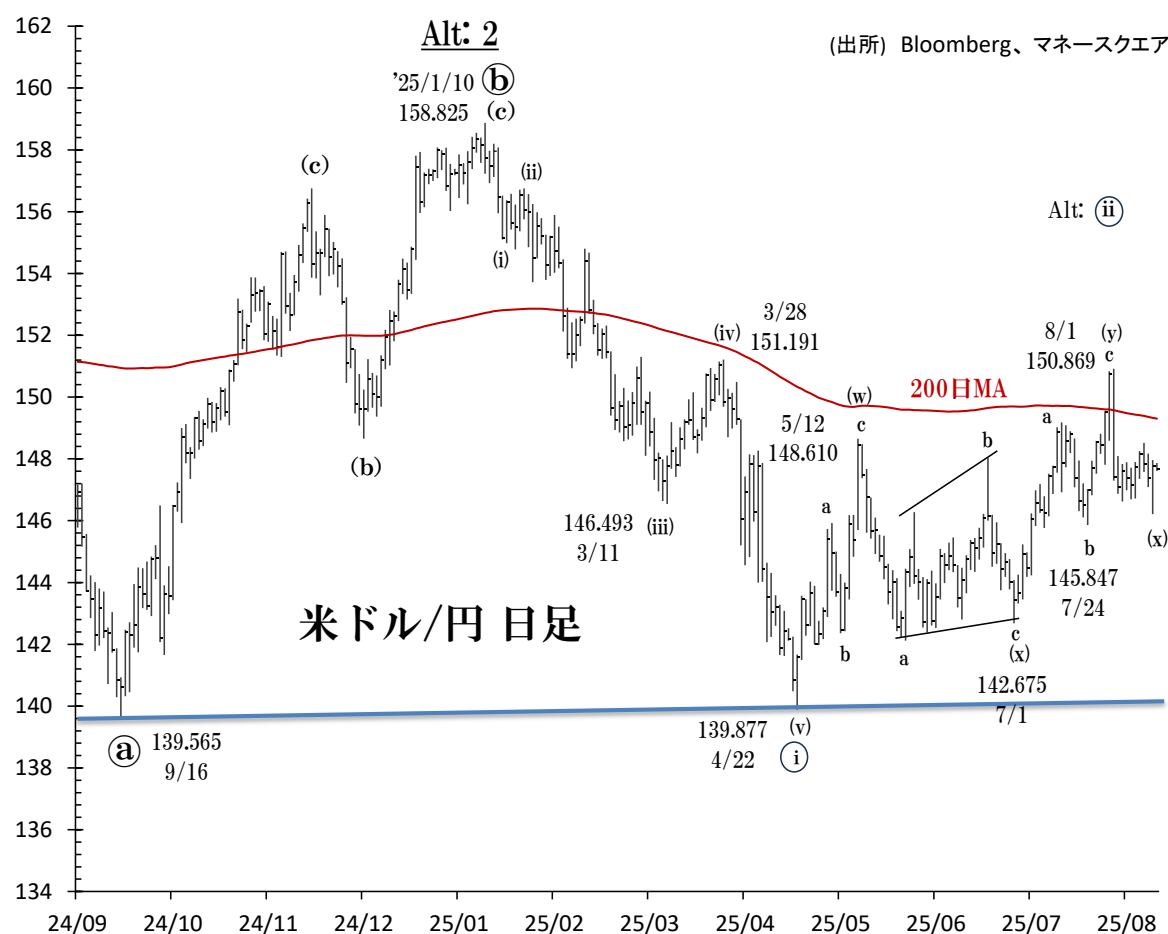
【週足 エリオット波動分析】

161.938 円(24/7/3)から C 波によるドル安・円高トレンドが進行中です。この C 波は(先ずは)三波構成 (a)–(b)–(c) が想定され、158.825 円(1/10)から©波によるドル安・円高が進行中とみられます。

今年 1 月からのドル安・円高を、第 3 波による下落とみることもできます。現時点でサブシナリオですが、これによれば、先々 1 ドル = 120 円試しが視野に入ります。第 1 波と第 3 波が黄金分割(1:1.618)比率関係になると仮定すれば、[122.625 円]という目標値が得られます。

4 月下旬以降のドル/円上昇は©波中マル ii 波に位置付けられ、それはまだ続いているとみています。

中長期でのドル安・円高基調に変わりはなく、ヘッド・アンド・ショルダーズの垂直目標値からは、いずれ 1 ドル = 120 円割れの可能性もみえています。



【日足 エリオット波動分析】

139.877 円(4/22)からのドル/円上昇はマル ii 波によるリバウンドです。4 月からの波形は複雑かつチョッピリなものであり、修正波としての特長をよく表しています。

4 月からの「ダブル・ジグザグ」(w)-(x)-(y)による上昇は、150.869 円(8/1)を以て終わったとみられます。

足元は引き続き、マル ii 波そのものが終わったのか否かを見極める局面です。

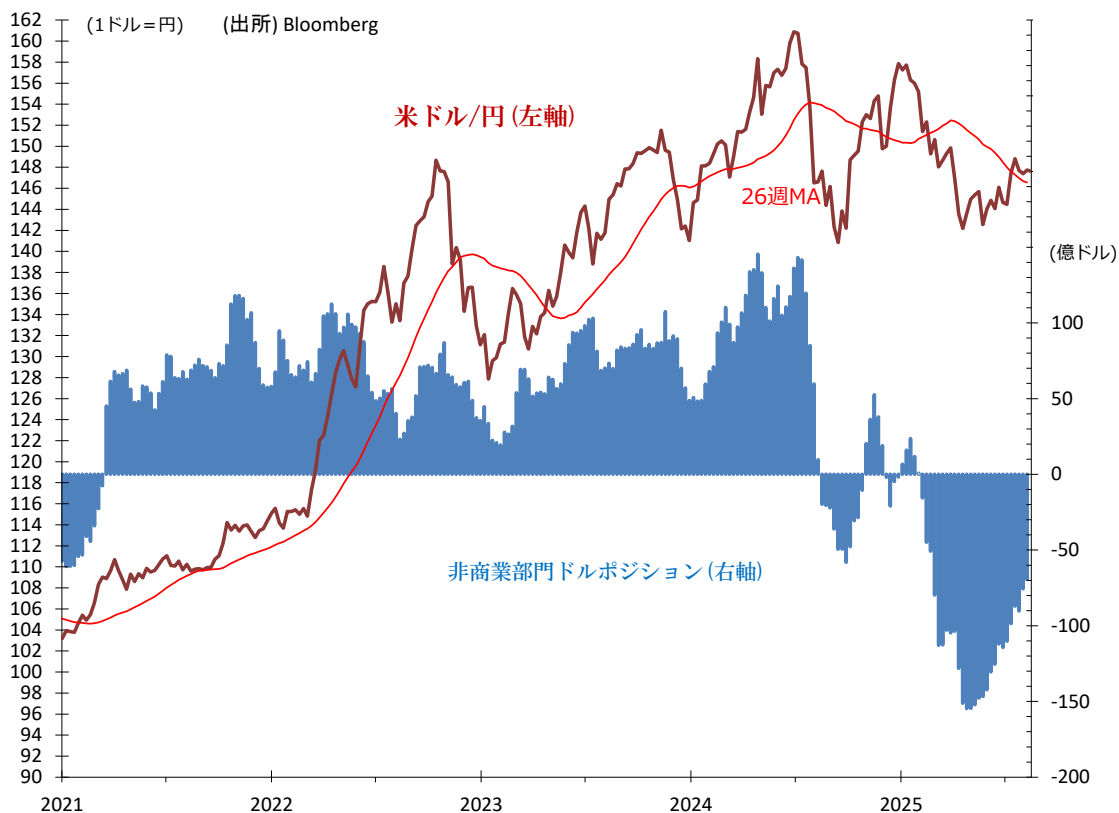
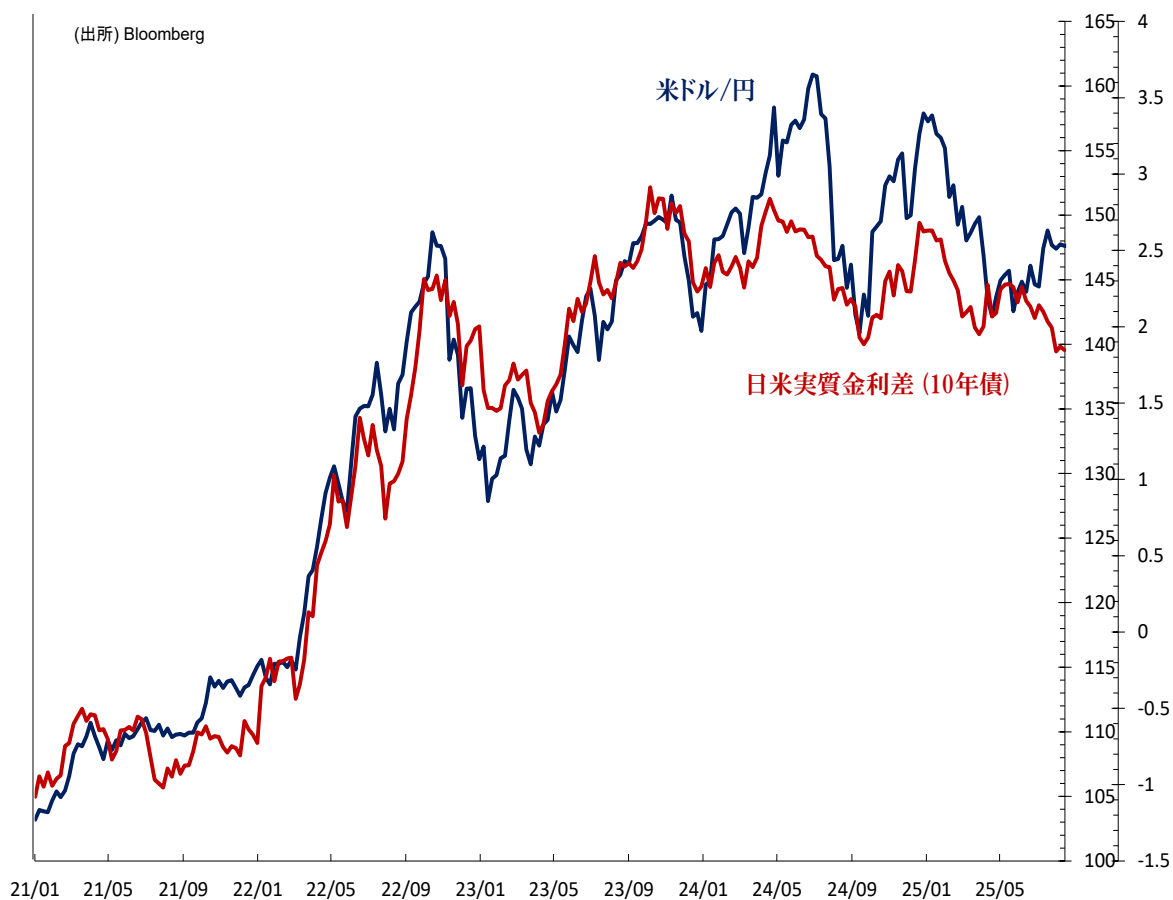
筆者は、マル ii 波が「トリプル・ジグザグ」に発展する可能性をみています。そうであれば、今後 2～3 カ月内に[151.586 円](1 月からの円高の 61.8%戻り水準)や[154.353 円](同 76.4%戻り)などを試すでしょう。その一方、今後 145 円処を明確に下抜くようなら、マル ii 波が終わった可能性を考慮する必要があります。

金利差からのドル/円推計値

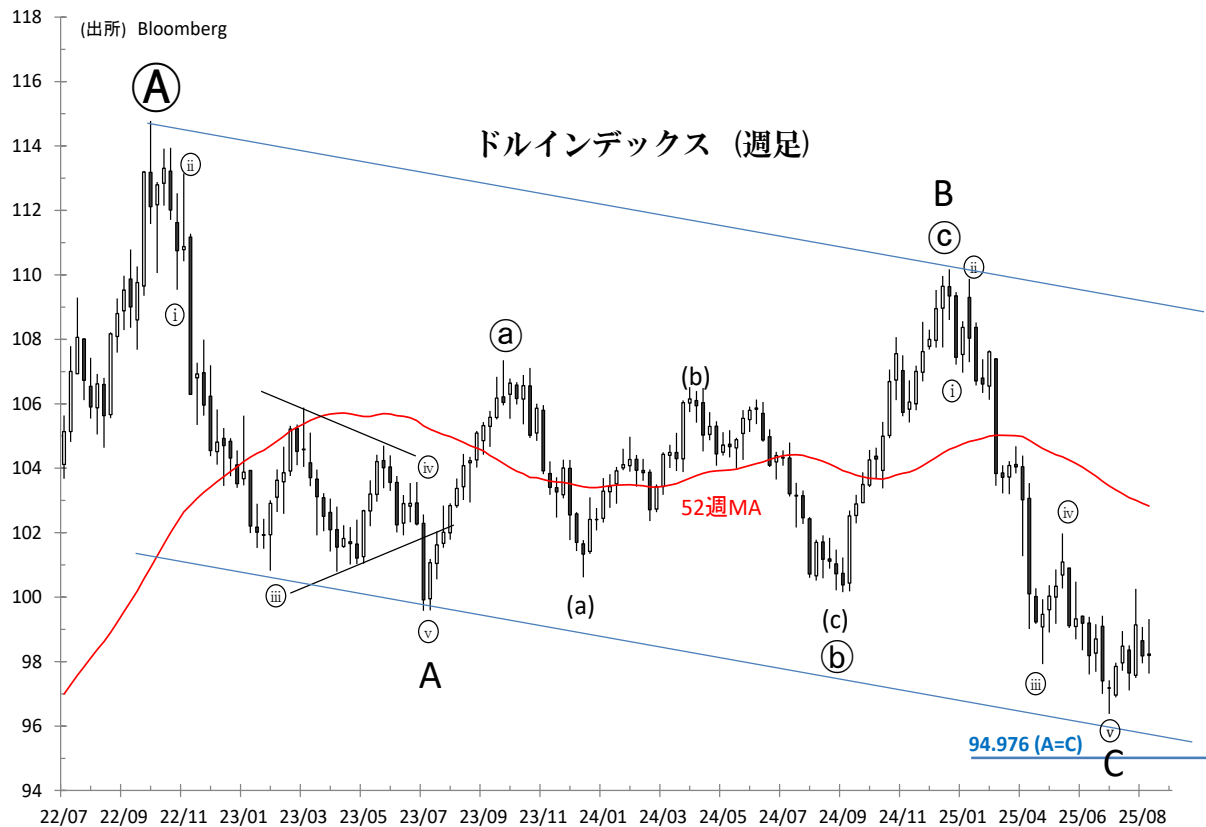
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[141.815 円]です。

投機筋の円買い持ち高が 2 月以来の低水準に縮小(2025 年 8 月 5 日時点)

IMM 通貨先物市場で投機筋(非商業部門)の円買い持ち高は、前週の 75.68 億ドルから 69.38 億ドルへ縮小し、2 月以来の低水準となりました。



ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

年初から半年近く続いたドル安 C 波は 96.377(7/1)で終わった可能性が高いでしょう。それは、22 年高値からのジグザグ(A-B-C)の完成を意味するものです。

ただ今回のジグザグ完成を以て、22 年高値からのドル安⑥波のすべてが終了した、とはみていません。筆者は⑥波は短くとも 2028 年頃まで続くともてています。

この見方通りだとすると、足元始まったドル高は(X)波に位置付けることが適当です。⑥波全体は「ダブル(トリプル)・ジグザグ」を描いていくでしょう。

ドル指数は、8 月から 11 月まで強くなる季節性があります。ここからすると、ドル高は今後の 3 カ月前後続く可能性があり、それは当面 101.977(C 波レツサーディグリー・マル iv 波頂点)を目指すでしょう。

可能性は小さいと思われますが、今後 96.377 を下回るケースでは、当然 C 波が続いていることになります。この場合は 94.976 を目指すでしょう。これは、A 波と C 波が等しく下がる水準のことです。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
